

北星学園大学経済学部北星論集第62巻第2号（通巻第83号）（2023年3月）・抜刷

【創作】

短編小説集

増田辰良

創作

短編小説集

増田辰良

目次

1. まねき猫
2. 書き人知らず
3. 詐欺メールの活用法

1. まねき猫

明日が大晦日という日の昼食後。ピンポーン、ピンポーン。インターフォンが鳴った。洗い物を片つけた手をタオルで拭いてから、女房は慌ててインターフォンの画面を覗き込み、応答スイッチを押した。

「はい！」

「キャッアイ宅急便です！」

「はい」

荷物は東京に住む女房の姉からであった。中には魚の干物が詰まっていた。

「わあ！ こんなにたくさん」

「干物ばかりかい？」

その声には私は思わず問いかけた。

「そうねえ」

「じゃあ、長くおいて置けるじゃない」

女房は干物を抱えるように持ち、リビングのドアにバタンと音を出させて、玄関の内側に置いてある冷凍庫へ仕舞いに行った。

テレビでは年末の特別番組が放映されていた。ときどき観るお笑い

番組の総集編であった。超ビキニのパンツのみを身に付けた若い男の芸人が身体をくねっては静止し、「大丈夫です。穿いてますから」と落ちをしゃべっていた。画面に映る客は圧倒的に若い女性たちである。

「観ろよ。若い女の子たちがあんな裸体芸を観て、飲んで笑っているよ。いかにも軽薄な芸で、あれのどがおもしろいのかね」

「どうせ長続きしないピン芸人なんですよ。下品だと思っけど、今の女の子たちには抵抗感や嫌悪感はないんですよ。おもしろくなければ、切ればいいでしょ」

「ああ、そうだな」

テレビのリモコンをオフにし、私は朝、読んだ新聞をまた広げた。

しばらくすると、

キーワード：猫、盗作、詐欺メール

ピンポーン、ピンポーン。

またインターフォンが鳴った。

「今日は、多いわね」と言っ、女房は画面を覗いてから、応答スイッチを「ビー」とオンにして、「はい！」と快活に答えた。

「すみません！ 飼い猫が行方不明になって探している者ですけど、猫の特長と連絡先を書いたメモをポストさせてもらってもいいでしょうか」

「ああ、はっはい」

返事してから、女房は玄関へむかった。

「すみません、二番通りに住んでいる者です」

「はい。心配ですね」

「よろしく願います」

女性は丁寧にお辞儀をしてから、まるで逃げるかのように踵を返した。

女房はメモを受け取って、リビングへ戻ってきた。メモには次のように書かれていた。

猫を探しています。

名前—クロ（オス）

色—真っ黒

しっぽは長い。

首輪—茶色い鈴を付けている。

最初は警戒しますが、人懐っこいです。

見つけられましたら保護してもらって必ずエサをあげてから、お電話下さい。

最下段には飼主の姓と電話番号、住所が書かれていた。

(11)

「裏の町内会じゃないか。今年だったか昨年だったか、夏に四、五匹の子猫が斜め向かいの家の庭に屯して、おばさんが騒いでたよな」

「今年の夏ですよ。うちの車庫の入口にも二、三匹がうずくまっていたもの」

「三日ほどでいなくなったけど、あれは銀座商店街の中にある花屋の猫だったそうだ。おばさんが探しあてて、箱に入れて連れて行ったら教えてくれたよ」

「あんな小さな猫が、なぜこんな何んにもない所に来たのかしらね」

「きっと、誰かが連れて来たんだろ。親猫がいなくて、子猫ばかりだったから」

「おもしろいよな。魚の干物がたくさん届いた後に、迷い猫だなんて」

私は笑うのを我慢して、さらに続けた。「まるで、わが家を狙ったみたいだな」

「年末の掃除をするのに換気をしたくて窓を開けたんでしようよ。その隙に外へ出たんじゃない。メモをご近所に入れさせてもらってると言ったわ。若くてきれいに化粧した方よ。生き物を飼うのも大変ねえ」

「ペットも今じゃあ、家族の一員扱いだから」

しばらく沈黙の時間が流れた。その空気を破るように女房が言った。

「今年はお正月、何も用意しなくていいよね」

「餅くらいは食べたいけど……。まあ今、届いた干物で十分だよ」

というのも女房のお袋さんが七月に他界したので、わが家は喪に服していた。

年が明け元旦、干物をおかずに朝食をとった後、テレビの正月番組

を観ていた。すると、窓越しに見えるブロック塀の上を黒い塊りがスツ
スツと忍者のごとく通り過ぎた。

「猫だあ！」

私たちは重奏はもろように言葉を発した。年末に受け取ったメモが頭に浮
かんだ。

「おい、さっき食べた干物の骨、あるよな」

「はい、まだ流しに置いたままよ」

「かせ！ 猫にやろう」

「放っておけば、ご主人の所へ帰るわよ」

「帰らないから、ああして歩いてるんじゃないか。早く捕まえて、
飼主に知らせてあげよう。正月だから家にいるだろ。骨、かせて！」

私は豆腐の入っていた空あきトレーに盛られた魚の骨を持って、玄関
フードを出た。猫は陽当たりのいいブロック塀の上でうずくまり、体
を膨らませていた。それはまぎれもなくクロであった。

「クロ」

声をかけてみた。

クロは警戒する目付きでこちらをちらりと見た。

「クロ！ クロ！」

先ほどよりも親しみを込めて呼んでみた。

しばらくこちらを窺ってから、クロは前足をつっぱりお尻を上げて
伸びをしてから、勢いよくブロックから飛び降り、リンリンと首の鈴
を鳴らしながら小走りで私の足元へ来た。私は膝を折って、トレーを
敷石の上に置いた。クロはニャーとも鳴かず、骨にかぶりついた。私
は部屋にいる女房に、「電話をかけてあげろ、今、わが家で骨を食べ
てますって」と、全開したままの玄関ドアからそう声をかけた。

「は〜い」

と答えてから、女房は電話をかけた。

私はクロが顔を右、左と傾げながら奥歯で骨をかじっているのを
じっと見ていた。

「電話したけど、出ない。留守電にもなってないし」

女房は玄関ドアから顔だけ出して声をかけてきた。

「天気も好いから、初詣にでも行ってるんじゃないか、きつと。後で
もう一度かけてみてくれ。正月から猫か。縁起のいいまねき猫だと良
いけどな」

私はクロの背をなでながら言った。

「そうかしら？ まねき猫は白じゃない？ これ真っ黒だよ」

と言って、女房は顔を引っ込めた。

骨を食べ終わったクロは満足そうにペロペロと口の周りを舐めた。
それから長いしっぽを立てて、私の向脛むこうすねと脹脛ふくらばねあたりをぐるぐる回っ
てはしきりに体を擦り寄せてきた。

「マーキングかあ。わが家は動物を飼ったこともないし、ましてや部
屋に入れたこともない。お前は内へは入れないよ。ご主人様が迎えに
来るまで私が相手をしてやろう」と、暢気なことを聞かせていると、「電
話かけても出ないよ。留守じゃないかなあ」と、女房は電話をかける
のはもうごめんだという声音で、玄関フードへ出てきた。

「そうかあ、じゃどうするか。このクロ」

「内へは入れないでね」

「解かってるって」

「車庫に入れておけば……。ダンボール箱もあるし、安全でしょ」

「車庫かあ。そうするか。夜、もう一度、電話してみよう」

私は車庫のドアを開け、クロを導き入れた。腹が空くと可哀相だと
いうことで、女房が持ってきたクラッカーを一〇枚、差し入れた。

クロはそれをすぐにバリバリとたいらげた。

夕食後、飼主に電話をかけたが、やはり出なかった。次の朝も、干物の骨とご飯を納豆の空きトレーに乗せて、車庫にいるクロに与えた。時間をおいて、五回、電話をかけたが飼主は出なかった。

「住所も解かるのだから、連れて行けば、お父さん」女房は私にそう声をかけてきたが、私は「電話をしても出ないのだから、連れて行っても飼主はいないだろ」と不満げに答えた。ということで、クロはその日も車庫から出してもらえなかった。

正月三日の朝となった。

「今朝は、魚は止めましょう。普段のおかずでいいでしょ」

「でも、クロの餌はどうするの？」

「猫だって、魚ばかりじゃ、厭きるんじゃないの。ご飯にお味噌汁をかけてあげましょ。お出汁をとった、カツオブシも乗せてあげるから」
「猫も厭きるかあ。そうだよな、今ごろのペットは人間よりも高価で栄養のあるものを食べさせてもらっているそうだから。それよりも後で電話してみろよ」

「電話番号を間違えてるんじゃないかな。何度、かけても出ないなんて」

「いいから、かけてみてくれ」

軽い昼食をとり、テレビで箱根駅伝の復路中継を観ながら、「おい！もう一時になるぞ。電話をしてみろよ」

私は女房を急かせた。

「お父さんがすれば、あの猫、お父さんになついているんだもの」

「解かったよ！俺がする」

呼び出し音の三回目か鳴ろうとしたとき、相手が受話器を上げた。

「はい！もしもし」

「ああ、△△さんですか」

「はい、そうですか」

「私、お宅の猫、今、うちの車庫にいます」と、単語が文章にならないままでいると、「ああ、いましたか。ありがとうございます」と言うなり受話器を耳から外して、誰かに教える声、「いたんだってー、クロ！」が鼓膜に強く届いた。

こちらの住所を伝えると、「すぐに、引取りに行きます」と返事の後、「ガチャン」と受話器は下ろされた。呆気にとられたようにプープーという器械音をぼんやり聞いている私に、「連絡ついたのね。よかった」と、女房は笑みを返してきた。

その後、十分とたたないうちに、道路端に車が停まる音がした。

ピンポーン、ピンポーン。

インターフォンに写る顔は年末の訪問者のそれであった。ただし、顔の筋肉は緩み放しであったが。私と女房は慌てて玄関フードへ出た。
「その車庫にいます」

女性は車庫のドアを勢いよく左へスライドさせ、顔だけ内へ入れて、「クロ、クロ、クロちゃん」と呼んだ。

「ニャー、ニャー」

車庫の隅からクロは飛び出して来て、ひざまずいた女性の胸をめがけてジャンプした。それを受け止めた女性はぎゅーっとクロを抱きしめ、「こんな所で寒かったでしょ。寂しかったでしょ」と、頭と背をなでなでした。クロはしきりに女性の顔を舐め回した。

「あら、魚臭い」

女性はクロを抱っこしたまま立ち上がり、礼を言うのかと思いきや、「クロは魚でもすり身しか食べませんのよ」と、ちよっとだけ顔を顰めて言った。

「ああ、一昨日と昨日の朝、干物の魚の骨を与えました。昔から猫は骨が好きだっていますし」

私はそう説明した。

「年末から、何度もお宅に電話をかけたんですよ」

と言う女房の語気はいつもよりも強かった。

「はい、家族で温泉に行ってみましたの。大晦日から出かけて、さきほど帰ってきましたのよ。毎年、恒例になっちゃって。クロは連れて行かないものですから。大変、お世話になりました」

そう言うてから、女性はショルダーバックから温泉饅頭と書かれた小箱を差し出した。断るわけにもいかず、「はあ、ご丁寧に、これは」と言っただけ、私はそれを左手で受け取った。

「クロちゃん。今年のお正月は災難だったわね。帰ってご馳走を食べようねえ。今日は、まだお正月だから。おじさんとおばさんにバイバイしようねえ」と、まさに猫なで声をかけた。

それからエンジンをかけたままの車へとむかい、猫を助手席において、こちらに向って軽く会釈をし顔を上げるとニッと笑ってから、アクセルを踏み込んだ。車は勢いよくダッシュした。

「立派な車だったなあ」

「高価なバックを持ってたよ」

私たち夫婦はそう嘆息した。

リビングに戻ると、点けたままのテレビにはゴール寸前のデッドヒートが映っていた。ほぼ並んだ二人のランナーはトラックの直線コースを、歯を食いしばり、両目を見開き、苦渋に満ちた顔を右へ左へと揺らせながら走っていた。それを伝える実況者のけたたましい音はその状況を一層、深刻なものにしていた。

(了)

2. 書き人知らず

男は市立図書館の新刊雑誌コーナーにいた。ある文芸雑誌の最新号を手に取り、目次を確認してから、ページを捲った。その雑誌は毎月、著名な作家が出す課題にそった掌編小説を募集していた。今月の課題は『蔵書』であった。字数は四千字以内で、優秀賞に選ばれば、五万円の賞金をもらえる。

男は、ほぼ毎月、投稿してきた。がしかし、受賞したことはない。悔し涙を流し、切手代を無駄にしてきた。

今回、男はこれまでにない傑作を創り、受賞も信じていた。しかし、切り(必着)期限に間に合わず、投稿できなかった。

最新号には優秀賞受賞作品の全文が掲載されていた。そのタイトルを見た瞬間、男は動揺し、読み終えると顔から血の気が失せた。このことの顛末は後で話すことにして、まずはその受賞作品の全文を次に紹介する。

一. 受賞作品

『二世代に認められた古書』

快盗ルパン

☆

森下高志は大学の教員を退職する五年ほど前から趣味の小説を本格的に書きはじめた。書齋にある書棚からは専門としてきた経済学の書籍があふれ、床には雑多な小説類が山のように積まれていた。

子供でもいて、経済学に興味があれば専門書を残しても使ってもら

(五)

える見込みはあった。がしかし、彼は子供を授からなかった。

森下はこれからも増え続けるであろう小説類のスペースをつくるために、もう読むこともないであろう経済学の書籍を古本屋へ売ることにした。それでもいざ手放すとすると愛着が消えず心残りになる書籍もあった。それらを選び出し、書棚に並べ直した。恩師の代表的な書籍、自分が刊行した書籍、経済学を研究するきっかけとなった専門書やテキスト、とりわけ学生のころに精神を集中させて読み返してきた古典などである。

ところが小説類が増えるにつれて、こうした懐想本させ処分しなければスペースは足らなくなってきた。そのなかから高く売れそうなものを選び、数回に分けて、大学の正門前にある古本屋へ持ち込んだ。セットもので購入時の定価は高くても古書市場では供給過多で廉価になりすぎているものもあった。それについては店主も買い取るのを^きが^がし、「処分せずに自宅において置けばどうですか」と、助言してくれた。

しかし、森下は「もう読む機会もないし、子供もないので残しても誰も利用しません。いずれ町内会の資源回収に出されるのが落ちですから。安くていいので引き取ってください」

と、自分からお願いをして買い取ってもらった。

それ以外の買い値の付きそうにないテキスト類と啓蒙書類は自宅へ引き取りに来てもらった。ダンボール箱で三十箱になった。それでも空いた書棚に小説類が埋っていくにつれて、まだ残している経済学の書籍の占めるスペースが気になりだした。

「この洋書も、今じゃあ手に入らない、いいテキストだけだな。でも、もう使わないし……」

最後の決断をした。

(六)

自分の刊行した書籍のみを残し、他のものはすべてデイバッグに詰めて古本屋へ持ちこんだ。店主は気難しい顔付きをして一冊ずつ外見をためつすがめつ眺めてから、奥付を見て、ページをペラペラと捲くつてはアンダーラインが引かれていないか、書きこみがないか、破れたページはないか、を点検した。それからネットで流通状況や相場を調べていた。そのあいだ、森下はかび臭い書棚に並んだ古書たちの背文字をゆっくりと見て回った。以前に引き取ってもらった自分の古書たちもお行儀よく並んでいた。手に取って値札を見ると、自分が売ったときの数倍の金額がついていた。

「誰かに買ってもらえよ」

棚に返しながらかう声をかけた。

「お客さん！」

店主に呼ばれた。

値踏みが終わったようだ。

店主は書籍に目を落としたまま話した。

「この六冊はきれいな状態なので、また需要もあるので引き取らせてもらいますが、こちらの二冊は洋書で古くて定評のあるテキストですが、書き込みも多いので、商品にはなりません。よろしいか」

「いいえ。この二冊も引き取ってください。持って帰っても、もう使いませんので」

森下はお願いをした。

「じゃあ、値段はつきませんが引き取らせてもらいます」

顔を下げたまま店主は言うてから、ニヤッと笑ったように見えた。

☆☆

森下には歳の離れた弟が一人いた。歩いて五分ほどの隣の町内に住

んでいる。その一人息子の太一君は森下が退職した年に地元国立大学へ進学した。子供のいない森下には唯一の甥っ子ということで何かとちょっかいをかけた可愛い存在であった。得意科目について訊くと、彼は理科系と文科系の二刀流だそう。銀行員をしている彼の父親は法学部を卒業し、公務員の母親は理学部数学科を卒業していた。うまく両親のDNAを受け継いだようだ。

この大学では二年生から三年生へ進級するときに本人の希望と成績を基準として所属学部を決めているそう。

森下は新年の挨拶に来てくれた太一君に訊いた。

「太一君。どこを希望しているの?」

「はい。昨年、聴講したイギリスのケルト文学がおもしろそうだったので、文学部の西洋史学科を希望しています」

太一君は、はきはきと答えた。

「それじゃあ、英語の力が必要だね。TOEICは何点くらいとれるのかな?」

「はい。入学したときに英語のクラス分けがあつて、受けましたけど八百点くらいでした」

「そうかい。それくらいあれば西洋史学は大丈夫かな」

「そうだといいですけど」

ところが後日、太一君は経済学部に所属することになった。よくある人数調整の結果らしい。もっとも彼はなんら悲観していなかった。

「どうだい。経済学はおもしろいかい?」

森下はすでに年金生活者であるにもかかわらず教師面してこう訊く機会が増えた。

「はい。経済学は文科系の科目だとばかり思っていました。理科系ですよ。数式を使って人間の満足度や欲望を表現するなんて、おも

しろいですよ。でも、けっこう難しい計算方法も使いますよねえ」

「たとえば、どんな?」

森下は試すよう訊き返した。

「そうですね。ラグランジュの未定乗数法^⑤を使って最適化問題を解きますよね。理学部の友人に話したら驚かれましたよ」

「そうだね。数学モデルを作って、コンピュータで解析をするから理科系と思つて取り組んだほうがアレギーを感じないかもしれないかな。しっかり勉強すれば、伯父さんが書いた論文も読みこなせるよ」

森下は微笑ながらアドバイスしたが、何かを思い出したようで、残念そうに続けた。

「そっかあ。太一君が経済学の勉強をするのであれば、蔵書を残しておけばよかったかな。退職する前に全部、処分したからなあ」

「大丈夫ですよ。必要な本ならいくつか図書館に入ってますから。不自由はしていません」

「そうかい。専門書もすべて売ってしまったから……。今じゃあ新刊でも手に入らないテキストもあったし。うまくいかなあ、人生は。あはっはっはっ」

森下は自嘲するよう歯茎を出して笑った。

そんな会話から一年が過ぎ、太一君は四年生になった。

「卒論のテーマは決まったかい? 早めにとりかからないと就職活動もあるし、大変だぞ。これは伯父さんの体験による。伯父さんは就職活動がうまくいなくて大学院へ進学したけど。あはっはっはっ」

「卒論の準備なら昨年の秋から少しずつ進めています。必修科目ですから。落とせません。四万字くらいを目標にまとめる予定です」

「ほう。どんな領域なの?」

森下は興味津々というふうに訊き返した。

「はい。起業の現状に興味があります。起業というのは企てる企業ではなくて、会社を興すほうの起業です。起業の決定要因を理論モデルで説明し、それを実証したいんです」

「そうかい。日本の起業はこれまでずっと低迷しているから、政策論としてもおもしろい領域だね。理論と実証、バランスもいいね。頑張りなさいよ。今、頑張って文章を創る努力をしておけば、就職してからも役に立つからね。何か解らないところがあれば、いつでも訊いてくれていいよ。できるアドバイスはしてあげるから。立派な卒論を創りなさい」

「はい。ありがとうございます。でも、自分で頑張ってためます。卒論をまとめることは唯一、学生らしい最後の作業ですから」

「そうだよねえ。そうそう、それでいいんだよ」

森下の声音は今どきの学生にはない心がけに感心したというふうであった。

☆☆☆

森下は義母の法要日を知らせるために弟の自宅を訪れた。義妹は二階の子供部屋にいる太一君に降りてきて、高志伯父さんに挨拶するよう声をかけた。それを制して、森下は、

「いえ、私が行きましょう。子供部屋を見たことも、入ったこともないですから」

と、トントントンと階段を上った。

ドアは開いていた。振り向き椅子から腰を浮かしかけた太一君と目が合った。

「ああ。伯父さん、こんにちは。すぐに降りようと思ったのですが、すみません」

太一君は腰を下ろした。

「いいんだ。伯父さんは子供がいないので一度、子供部屋を見てみたかったから。入ってもいいかな？」

「はっはい。どうぞどうぞ。散らかってますけど」

「おお。勉強中だったの？ こりゃあ悪かったね。ずい分、厚い本だね。何を読んでいるのかな？」

「ああ。これは数理経済学のテキストです。理論モデルを作る演習問題が付いているんですよ」

そう言うと太一君はテキストの開いたページを森下へかざした。

「そうかい。ほお、英語じゃないか。こんな英文が読めるのであれば、大学院へ進学をして、伯父さんのように研究者になればどうだ。あはっはっはっ」

太一君は、それには興味を示さなかった。

「伯父さん。これねえ、大学の正門前にある古本屋で買ったんだけど書きこみがしてくれてあって、重宝してるんですよ。店主が言ってましたけど、定評のあるテキストで今じゃあ、もう手に入らないものだって。古本にしては、また書き込みがあるわりにはちょっと高価かったですけど……。でもねえ、これを買った人はきっと几帳面な性格だったのじゃないかね。きれいに数式をフォローしてますよ」

「書き込みなんてあると、かえって読みづらくないかい？」

森下は首を伸ばしてテキストを覗き込むように見た。

「そうでもないですよ。ここの数式展開なんかは実にうまくしてくれていて、解かり易いですから。ほんと、いい本を手に入れましたよ」

太一君は相好をくずした。

「そう。どれ、ちょっと見せてくれるかい」

「はい」

手に取って、指を挟んでページを捲り、閉じてタイトルを確認してから、またページを捲った。そこには見覚えのある書きなれた癖字が丁寧に並んでいた。

二. 事の顛末

男が投稿できなかった理由を話そう。切の二日前、男は混雑した電車内で肩に掛けていたシヨルダールバッグからUSBの入った小物入れを掏られた。このUSBには投稿予定の小説と随筆などを入力したファイルが保存されていた。

今回、優秀賞に選ばれた作品は何力所かを除けば、自分が投稿を予定していたものと内容も文体もほぼ同じであった。どれくらい同じかというと、同じでない部分を指摘したほうが早いくらいである。それは最後の落ちの文章、ペンネーム、登場人物の名前と本の冊数である。明らかに、盗まれた自分の作品が投稿された、と男は確信していた。

図書館で受賞作品を読了後、男は放心状態のまま最終ページを見つめていた。時計の秒針が進むたびに、身体内から怒りがメラメラと燃え上がってきた。雑誌を手を持ったまま、トイレの個室へ入り、蓋をされた便座に腰を下ろして、スマホで雑誌社の代表へ電話をかけた。すぐに担当部署へ回してくれた。

「はい。お待たせしました。編集担当の伊屋見優多郎ですが」

快活な声が返ってきた。

「今月号の掌編小説の優秀賞の件で、お訊きたいことがあります」

男はつとめて冷静に話した。

「はい。失礼ですが。お名前は何？」

「はっはい。本名ですか？」

「はい？」

「花岡次太です」

「はあ？ 鼻を、かじった？ ふっふっ」

「いいえ。は、な、お、か」男はひと呼吸おいて、「じっ、た、です」と繰り返した。

「ああ。鼻を、かじった、さん。どんなご用件でしょうか」

担当者は受話器を耳に当てたまま、別の作業をしているようで、しきりにキーボードを打つような雑音が鼓膜を刺激してきた。

「実は、あの作品の著者にコンタクトを取りたいのですが。住所か電話番号を教えてくださいませんか？」

「それは教えるわけにはまいりません。個人情報ですので」

すぐに、事務的な冷やかな答えが返ってきた。

その声音に触発され、男は抑えていた怒りの種火にガソリンをぶっかける勢いでまくし立てた。

「あれは盗作です！ 私が創ったものです！ 先月の二十九日に海手線の電車内でUSBを盗まれました。そのなかに入っていた原稿で、投稿しようと思っていた作品です」

高額賞金を設定している文学賞のときにはしばしばこうした電話を受けることがある。担当者は驚いたように「えっ？」と応え、目尻にうすら笑いを浮かべ掛け時計に目をやり、また温かみを感じさせない口調で返した。

「そう言われましても……。私どものほうでは二重投稿の有無については確認しますが、いわゆる盗まれたものが送られてきたかどうかまでは判断しかねますが。警察へ連絡してはどうですか？」

男は聞き入れられないであろう空気を感じとったが、それでも冷静に説明を続けた。

「いいですか？ 快盗ルパンなんてペンネームからして疑わしいですよ。快盗の快も間違ってますよ。あの作品は現実にあったことをフィクション化して書きました。なので、本文にある義母の法要日は私は知っています。四月の一日です。これは事実です」

「うん。そうですか。嘘みたいな日にちですねえ」担当者は上の空で答え、「ふん」と鼻を鳴らした。

「事実です！ こんなことは書いた本人しか知りませんよ。私はフリータですが、伯父が大学教授であったこと、甥っ子が国立大学へ進学したこと、すべて事実です。彼らに確認してもらってもいいです。信じてくださいよ！」

「そう言われましても……」

担当者の困惑した表情が目につく。

男はなおも沸きあがってくる苛立ちを懸命に抑えていた。が担当者のしれっとした口の利き方に、抑え切れなくなってしまった。

「おたくの雑誌は盗作を平気で掲載して、大衆に売った、ってことですよ。審査委員はどこを評価したんですか？ 大変なミスを犯してますよ。解ってるんですか!？」

「……そっ、そう一方的に言われましても」

担当者は一瞬、ムツとしたが、ふたたび掛け時計を見てから、これでは埒が明かないと機転を利かせ、今度は確かめるように訊いてきた。「じゃあ、どこが盗作部分なのか、電話じゃ説明しづらいでしょうから、文面を送ってきてください。それを見てから考えましょう」と、一方的に電話を切った。

男はこの対応に腸が煮えくり返ったが、要求どおり盗作部分を指摘することにした。部分といっても自分のオリジナル作品を五カ所だけ変えたもので、雑誌のコピーを取り、赤のボールペンで該当部分

に次のような書きこみをして投函した。

オリジナル版のペンネーム「冷田八宝菜」↓「快盗ルパン」へ変更。
オリジナル版の登場人物名「荒又」↓森下へ変更。「裕次郎」↓太一へ変更。

オリジナル版の冊数「三冊」↓二冊へ変更。

オリジナル版の最後の二行《荒又は確かだという声音で言った。》これは、伯父さんが売った本だよ》↓削除されている。

しかし待てど暮せど、雑誌社からは音沙汰がない。男は腹立たしい気分にならねど、また電話をかけた。担当者は受け取った文面を用意するから、しばらく待てと指示してきた。乱雑に積まれた書類や書籍を移動させてなんとか封筒を見つけた。ハサミでゆっくりと上部を切り、文面を別の書類の上に広げてから、再び受話器を耳に当てて、「はい。はい」

と民謡の合の手を入れるような返事をして答えた。

「文面、ありましたよ。お待ちどうぞさまです」

男はこの言葉を一日千秋の思いで待たされた。すでに男の脳天は噴火寸前であった。カッカカッカとマグマが湧き出していた。

そんな男の感情を斟酌することなく、担当者は前回よりも五月蠅きうなものの方をした。

「最初の三つは、盗作の理由にはなりませんねえ。とくにペンネームの快盗もあやしい『怪』にしないで、たのしい『快』にするなんてユーモアがあるじゃないですか。それに比べて、あなたのオリジナルである、ひ、え、た、はっ、ぼう、さ、い、はいただけですねえ。テレビアニメの『忍たま乱太郎』に登場する悪役の稗田八方齋のことです

よね。ふん、ふん」

悪役という言葉と鼻を鳴らされたことに男の怒りはさらに三段階ほど昂ぶった。その怒りを抑して抑して抑し殺して、慎重かつ丁寧に言葉を選びながらゆったりした口調で一つずつ説明をし、優秀賞受賞作品は自分のオリジナル版の盗作であることを涙ながらに訴えた。

担当者は男の嗚咽の混ざった荒い鼻息を鼓膜に受けながらも落ち着きはらった口調でさきほどよりも大儀そうに答えた。

「はい、はい。お気持ちは十分に理解しました。よろしいですか。あなたが付けていたとおっしゃる最後の二つの文章ですが、これを削除したことによって、作品の落ちに重みが増したと思いますよ」

そう説明する声はお前こそ嘘をついているのだろう、と言うふうに聞こえた。さらにこう付け加えた。

「鼻を、かじった、さん。あなたも頑張っていて、いい作品を創ってどしどし応募くださいよ。お待ちしてまゝです。来月の課題は『悔し涙』です。賞金は五万円です」

この創作文の作者は男の口から担当者に対して、「こん畜生、バカヤロー！」とド頭、カチ割って、ストローで、血、吸うたらか!!」と一言、二言、三言、罵声をあびせるうまい文章を作った。がしかし、書かないことにする。

(了)

(注) ラグランジュの未定乗数法とは、微分法の一つである。例えば、限られた所得(制約条件)のもとで満足(効用)を最大化するように消費量を決める(最適化)問題を解くときに用いる。なお、ラグランジュ(一七三六年から一八一三年)とは数学者の名前である。

3. 詐欺メールの活用法

帰宅すると、荻野将太は弾んだ声で、女房に声をかけた。

「職場のPCにおもしろいメールが届いたよ」

女房はテーブルに広げていた雑誌を閉じて、

「あら、おもしろいって……」

と、つられて笑みを返した。

「ついに、俺のところにも詐欺メールが届いたよ」

荻野はニヤニヤしながら答えた。

「詐欺? メール? 何だか、やけに嬉しそうねえ」

「うん。ふっふっふ」と、荻野は笑みを浮かべたまま「その脅しの

内容がさあ……」と言葉を切った。

女房は何ですかあ、早く教えなさいよ、と言いたげな目をした。

「どんな内容だと思う。ふっふっふ」

「わたしが解かるわけないでしょ」と返したものの、「還付金詐欺とか、未公開株の売りつけとか、名義を貸してくれとか」と、幾つか詐欺の手口を答えた。

「ブー。実はな……」と、また言葉を切ってから、ニヤリと笑い「俺

はアダルトサイトを覗いてはオナニーに耽っているようだ。そんな映像と音を盗み取ったんだってさ。それをバラされたくなければ、金を送

金しろ、だだよ」

「えっ? あなた……」

女房は一瞬、怖い目をした。

「ああ、心配するな。職場のPCはそんなサイトへはアクセスできないように設定されている……」と、ちょっと間をおいてから、「この歳でオナニー。懐かしい言葉だ」

荻野は思わせぶりの目をして女房の顔をまじまじと見た。

女房は微笑に笑みを浮かべて視線を逸らし、

「他人のPCの画面を盗み見るなんて、できるの？」

と、訝る声音で訊いてきた。

「そんな技術もあるそうだよ。Zoomだって、録画と録音ができるから、ウイルスで感染させると簡単にできるんじゃないかな」

「へっ。でも、嫌ですねぇ、こっちを全部見られてるなんて」

「心配ない。相手はそう言って脅しているだけだから。全部ウソさ」

荻野はきっぱりと答えた。

「でも、そんなサイトに……」

女房はいかにも疑わしという目をして訊いた。

「だから、アクセスできないし、したことないって。職場じゃ、そんな暇はない。俺のメールアドレスは仕事の関係上、公開されているんだ。職場のホームページに入ればすぐに分かる。ウィキペディアには俺の簡単な氏素性も紹介されているから、それらを見て送り付けてきたんだろうよ」

女房の疑いを打ち消すよう荻野は興奮した口調で断言した。

「でも、火のない所に……って言うじゃないですか」

女房はちやかすよう言った。

「おい」と少し声を荒げ、「疑っているのか。うん、たとえばだな、YAHOOでサブリメントのサイトを見ると、どういう技術か知らないが、そんな閲覧履歴を使って、閲覧者に広告メールが届くことがあるんだ。そんなところから送りつけてきたのかもな」と説明を加えた。

「じゃあ、そんなサイトを見たことがあるのね」

まだ疑い深い声だった。

「あるよ。一度だけ腱鞘炎けんしやうえんを和らげるサブリメントを検索したことはある。悪いことをするヤツはどこからでも情報を手に入れて、脅してくるもんだ」

また断言した。

「それで、そのメールはどう処理したの？」

事情を理解したものの、女房はまだ心配顔で訊いてきた。

「下手糞なレイアウトと無駄な改行が多くて、三枚のうち二枚だけプリントアウトできたよ」

「プリントアウトしていいの？」

女房は口を尖らせて言った。

「大丈夫だって、返信してないから。相手は何も気づきようがない。返信しちゃうと、次からはちゃんとした受信ボックスに届くん。そんな面倒事は起こしたくないからな」

「ふん。で、プリントアウトしてどうするの？」

「そだよ。時間があつたので読んで校閲してみた」

荻野のその声は得意げだった。

「あら、嫌だ。校閲って、文章をチェックしたの？」

「そう。だってなあ、読むとこれがまったく下手糞な文面なんだよ。これで騙せるのか？って疑問に思ったら、つい赤のボールペンで修正していたよ。まるで学生のレポートに手を入れるみたいになさ。世にはびこる詐欺師の文才がこれじゃ、日本語を母国語とする者として恥ずかしい」

「何をしているの？ 詐欺のメールよ」

女房の声は叱っているようだった。

「だからあ、大丈夫だって。言葉遣いの幼稚さ、句読点を打つ場所や改行の仕方の間違いを直しただけだ。さらに脅しの内容も事実無根で、ウソを本当のように書いてないんだよなあ。その文章力はひどくて……」ここで荻野は明らかに口元を緩めてから、「文章を書くことを生業としている身からすると、とてもじゃないが許せない国語力さ。日本語が大泣きしているようだった」と続けた。

「送り主はきつと賢くない人でしょうよ」

女房の口ぶりは吐いて捨てるようだった。

「だろうな。たとえ詐欺の文章といえども、後世に残る文学作品として評価を受けたいじゃないか」荻野はまた口元を緩めて、「で、校閲した文章だけど、読みたい？」と、デイバッグから一枚のコピー紙を取り出した。

「ちょっと、読んでごらん」

「ああ」と言って、受け取ると女房は表裏二ページの文面に目を落とした。

《2021年9月4日(土) 13:30。》

悪いお知らせがあります。

数ヵ月前にあなたのデバイスにアクセスしました。

私はあなたの秘密をたくさん知っています。私は、あなたがインターネットにアクセスするために使っているすべての機器のOSにトロイの木馬ウイルスをインストールしました。このソフトウェアは、あなたのデバイス上のすべてのコントロールにアクセスすることができます。

あなたの情報、データ、写真、閲覧履歴をすべて私のサーバーにアップロードすることができます。

あなたのすべてのデータ、メッセージャー、ソーシャルネットワーク、メール、チャット履歴、連絡先にアクセスできます。

あなたの通信簿や個人的な写真、すべての秘密のデータをインターネット上に掲載することもできます。

ただし、私のウイルスはシグネチャを更新し、ウイルス対策ソフトからは見えないようになっています。

あなたの情報を集めているうちに、あなたがアダルトサイトの大ファンで、中毒性のある動画を楽しみながら見ていることがわかりました。

あなたがオナニーをしてオーガズムに達するという、あなたの汚いシーンをなんとか録画しました。

私が数回クリックするだけで、すべての動画が知り合いに表示されま

す。

これはあなたの評判を永遠に台無しにしようかもしれません。あなたが好きなビデオの仕様を考えると(よく解かっている、と思いますが)、それはあなたにとって本当の意味での災難となるでしょう。

次のように解決しましょう。ここに私のビットコインウォレットがあります(原文では、ここには数字とアルファベットの混ざった42文字

がある。)このメールを開いた瞬間から3日以内に、あなたが私に131918円(JPY)(送金時の為替レートでビットコイン換算)

を送金してくれば、私はこの汚れをすぐに取り除きます。その後はあなたのことを忘れてしまいます。また、あなた(原文は、お客様)

のデバイスからすべてのマルウェアを無効にして削除することをお約束します。

私はいつも約束を守ります。

送金がない場合は、あなたのビデオと詳細情報がインターネット上に公開され、すべての人とあなたの愛する人を見ることができます。

もう一度書きますが、あなたの評判を永遠に台無しにします。

私を探そうとしないでください。

警察やその他のセキュリティ機関に連絡しようとする、あなたの詳細が公表されてしまいます。

自分の評価を意識する(まったく意味不明の原文)。

・・・》

読み終わると、女房は安堵した声で「この一件だけですか？」と訊いてきた。

「いいや、過去に五件ほど、届いたけど、読んだのはこれだけだ。この種のメールは迷惑メールボックスに着信するんだ。このボックスに届いたものは、いつもは読まずに片っ端から、削除するんだが、今回は別の事務連絡の件名があって、それと間違えて偶然開けてしまったのさ」

「ふうん、偶然ね」

「そう。俺がパソコンの操作やネット音痴なことは知ってるだろ。だからな、文面にある専門用語の意味が解からんだあ。チャットなんてやったことないしさ。ビットコインは聞いたことはあっても、その仕組みを説明してくれないとまったく解からん。『私を探そうとしないでください。』って、あるから返信もできない。だから、たとえ私を送ってやりたくても操作できん」

荻野は目尻を下げて笑い出しそうな声で言った。

「そうですね。ワードやエクセルさえ十分に使いこなせないのだから」

そう言う女房の目は笑っていた。

「使いこなせなくて悪かったな」

荻野もちゃかして語気強く答えた。

「で、どうだ」と、感想を訊かせるよう迫った。

女房はやれやれという顔をして「とても、すっかりした文章ですね。でも、この内容で騙される人がいるのかなあ？」

「お前もそう思うだろ。そこで校閲している途中で気づいたんだが、どう書けばウソを本当らしく思い込ませられるのかって。白の事件を真っ黒な冤罪事件に変えるように。でないと、金を巻き上げられないからな」

荻野はまたちゃかすよう語尾を強めた。

「それって、まるで上等のミステリー小説を書くみたいですね。お父さんの趣味の延長線上にあるじゃないの」

女房の声は明るかった。

「ピンポーン。そのとおり。ミステリー作家は上手く読者を騙して、愉しんでもらうんだ。その書き方やアイデアをこの詐欺メールから教わろうと思って。だから、読まずに削除したメールのことが悔しくてさ」

「何でも教材になるものなのね」

その声は感心と呆れとが半々であった。

「読み手が冷静に、そう読むから教材になるんだ」

まるで感心しろと言いたげだった。

「それに何件かの詐欺メールを読み比べて、詐欺師のアイデアの出し所を抽出してみたり、文体や専門用語の使い方を見て、その学力も推し測れるだろ」

荻野の声は一段と明るく弾んでいた。

「へーっ。そんなふうに考えるんですか」

「そう。件数が多ければ事例研究にだってできるんだ」

「研究？ おもしろい見方をするんですね」

女房は、今度は呆れた、と言いたげだった。

「研究者はこうした読み方をするんだよ。そうすると、手の込んだミステリー小説が書けるようになる」

「ふうん」

と、女房は困惑した声をもらした。

さらに荻野は説明を続けた。

「この読み方には他にも効用がある。質のいいミステリーを読むことは言葉を鵜呑みにする一歩手前で立ち止まる訓練になるんだ。こんな言葉には簡単に騙されないぞ、と構えることはこのややこしい社会を生き延びる武器ともなる」

「なるほど、でも、ミステリーならもっとハラハラドキドキする臨場感のある文面にしないと」

女房の声は真剣みを帯びていた。

「そう思うのが素人さ。この種の詐欺だといくら臨場感を醸しても文面だけでは騙せないよ」

「なぜですか？ 他に方法がありますか？」

「方法じゃなくて、金を騙し取るには必要十分条件を満たさなきゃ」

「数学みたいですね」

「もっと頭を使えということさ。まず、メールの受け手である俺の側に何らかのやましい行為があって、それを詐欺師が事実として握っている。それを公開されることに俺がとでもビビっていることだよ」

「たとえば、浮気の現場写真のようなものですかね？」

荻野が口にする前に女房は正解を答えた。

「そのとおり。だから、このケースだと俺がオナニーをしている映像の一部だけでもいいから俺に公開すればいいんだ。そうすると、見ら

れていることをとりあえず信じるだろ。しかも、恍惚感に耽る己の顔を見たいとも思わんがな。そんな男がいるか？ いれば変態だ。それこそ汚い」

荻野は笑みを浮かべて女房を見た。

「……」

「だから、どうやったって引っかからないし、どだい俺はこんな行為にはとても寛容だよ。昔のエロ本がデジタルに替わっただけだ。いつの時代も男の必需品だ。その行為自体、健康、元氣、そのものじゃないか。できるうちは大いにやりなさい！とエールを送りたいよ。その後数年で、古稀こきになる身には羨ましいかぎりだなく。ふっふっふっ」

荻野はまた思わせぶりの視線を女房へ向けた。

女房は無言のまま微笑で応えた。

「個人が愉しんでいることを盗み見しているとすれば、そっちの方がよっぽど異常体質だろ」

「そうですね。プライバシーの侵害もはなはだしい」と、女房は同意を口にしてから、「でも、なぜ、お父さんに送り付けてきたのかしら？」

「その理由は簡単だ。俺が最高学府に属しているから、そんな人間の羞恥心にすがりたいのだろうよ」

「なるほどお、社会的な地位が高い人ほど精錬潔白な人と思われないでしょうから」

「そんなことはない。それは俺のような仕事をする人間への美しい偏見だ。いや美しい誤解だ」荻野は笑みを含んだ声で答え、「ありがた迷惑な話だな。俺たちだって生き物だ。俺の業界では意外とこんな趣味を持った方はいるよ。かなり前に盗撮容疑で逮捕された研究者の自宅捜査をすると、その手の物品がゴロゴロ出てきたことがあった」

と続けた。

「ああ、新聞に出ていて、お父さん笑いながらその研究者の立派な業績を教えてくださいましたよね」

「そう。そんなことを知っても、それはあの方のご趣味なんだ、で終わるのよ。他人が他人の趣味を評価できんだろ」

そう話す荻野は愉しそうだった。

「そうですねえ。……でも、なぜこの金額なのかしら？」

女房はまた文面に目を落として訝るよう訊いてきた。

「おお、金か。そうだよな。要求するわけだから、根拠とか基準があつてしかるべきだし、それを教えろよな」荻野はこぼれそうな笑みを浮かべ「きつと、いい加減さ、根拠なんてない」と、突き飛ばすよう強い口調で返した。

「でもお金を送らないと、また脅してくるんじゃないですか」

女房は、また心配そうな声で訊いてきた。

「いいや、もう脅してこないだろうよ。このメールは九月に届いて、メールを受信してから三日以内に送金しろって書いてある。読んだのは二週間後だ。それに今は11月だから。別のカモを物色しているさ。そんな脳足リン野郎の仕業だ」

「届いてないのでですか？」

「残念だが、続編はきていない」

「あら、残念だなんて」

「だって、そうだろ。これって小説のネタになるじゃないか」

「本気で小説にするつもりですか？」

女房は目に力を込めて荻野を見た。

「本気だよ。俺は文章を作ることについてちやあ、いつも本気だ」

「でも、原文は……？」

荻野は女房の心配を承知の上で、

「いいかあ、時間をかけて校閲までしたんだぞ。それにたとえ原文を公表しても、詐欺師野郎は『それはオレが書いた文面だ。盗作だ！』って、名乗り出て来れると思う？」

と、訊き返した。

女房は数秒、黙考してから、

「即、逮捕されちゃいますね」

と、荻野の目を見て言った。

「だろ。でもな、これを現段階で小説にしても誰も読んでくれないよ。だってそうだろ、小説を読むのが好きな人って非日常な世界を体感したい人たちだろ。それにふさわしい特別なドラマがあるわけじゃないから」

「ふうん。ドラマって、どんな？」

その半分口の開いた顔を見て荻野はここぞとばかりに真顔で話した。「たとえばだな、この校閲文を返信してみたら詐欺師が判明して、これは俺の研究業績に嫉妬している職場の同僚の仕業だったり、パソコン音痴の俺への嫌がらせだったり、単位を落とされた学生の悪さだったりして……」

「まあ」

女房は思わず顎を引いた。

「もっと言えば、俺のヘソクリを狙ってお前がやったことかもしれない。あはっはっはっ」

荻野はニツと女房を睨みつけてから歯茎を出して笑った。

「あくあ、呆れた。私はネットを見ませんし、操作なんてできるわけ

ないでしょ」

「冗談だって。でもな、こんな筋書きだとちょっとはドラマになるだ

ろ」

荻野はどうだと言わんばかりに目尻を下げた。

「ふーっ」と女房は亭主の想像力のたくましさを息で吹き飛ばしてから、「じゃあ、その後どんなミステリーに仕上げたいの?」と、ぜひとも知りたいという声で訊いた。

「だから、その構想が上手く浮かばないから、続編のメールを待っているんだが……」

「えっ。期待して待っているのですか?」

女房はキョトンした顔になった。

「うん。でも届きそうもないから、まずは川柳を作ってみた」

そう言うと、荻野は一枚のルーズリーフを女房に手渡した。

〃詐欺メール 知能の低さ 曝け出す〃

〃詐欺メール 返信できず 悔い残る〃

〃詐欺メール 続編途絶え 日々寂びし〃

〃詐欺メール 続編来ずに 筆止まる〃

〃下手糞な 詐欺のメールを 校閲す〃

〃続編を 待ちくたびれて 筆を折る〃

(了)

付記。その後、ついに続編が届いた(2021年11月10日水、23:29)。脅しの内容は前回と同じである。どういう訳だか文面は推敲されたようで、すっかりしていた。ページ数も増え、パソコンの操作法、(こ丁寧にも)こうした詐欺メールを受けないためのパソコン上の対策までもが書かれていた(あなたが悪さを止めばいいだけのことだ)。幾つかの言葉遣いからして送り主は特定の詐欺師であるようだ。今後、もう少し、この事例を集めて、研究対象にしてみたい。

